
とある紅魔館執事の記録

Malfunction

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある紅魔館執事の記録

【Nコード】

N0960BA

【作者名】

Malfunction

【あらすじ】

ある日唐突に幻想入りしたオリ主。彼は偶然運良く紅魔館の主、レミリア・スカーレットに拾われ、紅魔館の執事として生きていくことになった。そんな彼が遭遇した、ちょっとした策謀のお話。

N e g r o n i I (前書き)

はじめまして。

初投稿＋初執筆です。

駄文とは思いますが、生暖かく見守っていただければと思います。

N e g r o n i I

I. N e g r o n i I

「ふう……結構疲れるな……」

この赤い、いや、朱い……ちょっと違うな、紅い洋館にたどり着いてからはや一週間。親切な当主に拾われて、雇われてからはや一週間。僕は未だに掃除に慣れずに居た。

そもそも、だ。この屋敷には電気が通っていない。いや、この屋敷に限らずこの幻想郷と言われる現代社会から隔離された妖と、忘れ去られたものの領域には電気が存在しない。

それはつまりどういう事かというと、掃除機が無いってことで、と言うよりもありとあらゆる文明の利器が無いか、あるいは稀少なため、外の世界での掃除とは違って結構時間がかかるし体力も居る。

掃除を簡単にするための方法は今練習中で、使ったら逆に大惨事を巻き起こしてしまうために使うわけにもいかず、つまりは僕は水からの手と足と、あと原始的な道具を少々使ってこの外観からは似合わないほどに広い洋館を隅から隅まで掃除しているってわけ。

「この廊下はこれで良いかな……」

一応、僕の見立てでは、結構綺麗になったはずだ。もっとも、上司となったメイド長の十六夜咲夜さんに言わせると、まだまだ甘い、と言った評定をくだされるのだろうか。

「そうね……いいわ、合格。次はメイド妖精の待機部屋よ」

と思ったそばからどこからとも無く現れて、指示を出して消えていく。正しく神出鬼没で、人間とは思えない。

どうして僕がこんな洋館にたどり着いて、しかもそのまま居着くことになってしまったのか。それにはちょっとした訳がある。

あれは何時もどおりに帰省を終えた日だった。

何時もどおりに地元の空港から羽田まで飛行機で飛ぶ。そして何時もどおりに上位クラスのゆったりとしたリクライニングチェアに座り、何時もどおりに飛行を満喫していた。

空の旅なんて代物は、僕にとってはあまりにもありふれていて、あまりにも日常的すぎて、特に危機感を抱くわけでもなく、航空事故が起きたら起きたで——いや、航空事故に当たるぐらいなら宝くじに当たって欲しいと思いつつ、暇つぶしに買った本を読んでいた。

平穏な空旅で終わるはずだった。窓の外を見るまでは。

特に何かを思うわけでもなく、ただ小説を読むことに少し飽きたから視線を外に動かしたのだった。上は蒼穹、下は大雲海と大海原。それ以外に見えるものはない。はずだった。

遠くに黒点が見えた。いや、黒点というには大きすぎた。近づいてきているソレは、すぐに輪郭が判るほどになった。小型機だった。いや、もっとありふれた言い方をするのなら、戦闘機、と分類さ

れる機体だった。

妙な機動をしていた。具体的に言うならば、軽くロールしながらふらふらと飛んでいた。

アクロバットの練習かな？　と思ったのが第一印象だった。だが違った。ソレが明らかに異常に接近することに気付いた時、僕は気付いたら叫んでいた。

機長も気付いたらしい、機体が急激にロールする。

だが、無駄だった。無駄に過ぎた。無駄なあがきだった。

超音速で突っ込んできた戦闘機は、綺麗に旅客機の腹をえぐったようだった。ようだった、というのは下から衝撃が届いたからだだった。

ソレよりも不味いことがあった。どこからか飛んできた破片が見事に僕を椅子へと縫いつけていた。

人生ここまでか。やり直したいな、違う、やり残したことって無いか、と思いつつも意識が遠のいていく。

青翠色の、明らかに体に悪そうな粒子が視界を輪舞しているのを見たのを最後に、僕は意識を手放した。

さようなら、人生。

そのはずだった。

ここはどこだろう。

左手には緑豊かな森、右手には霧の立ち込める湖、目の前には紅い洋館、後ろには富士山よりも高そうな山。

はてさて、僕はどのようにしてこんな所に迷い込んでしまったんだろうか。目の前の洋館にとりあえず訪ねるべきだろうか、それとも死んだはずの我が身が、右胸はたしかに破片に貫かれたのに元通りになっていることにパニックするべきだろうか。もしかしてあの飛行機はシェオゴラスの悪趣味な暇つぶしだったんだろうか。流石にそれはないか。

「とりあえず、目の前の洋館が一番まともそうだなあ……」

誰も好き好んで自ら遭難しそうな山とか森に入ることはないだろう。目の前に人が住んでいそうな屋敷があるなら特に。

「しかし悪趣味だ……」

なんとたって紅、赤、朱である。洋館それ自体も、ソレを囲む城塞のような塀も。流石に地面と堀を満たす水までは紅くはなかったが。

「だがどこだろう、ここは」

こんな紅に染まった洋館があるなら流石に知りたくなくても勝手にテレビが紹介するだろうに聞いたことがない。まさか現世ではないのだろうか。いや、死にしまった時点でソレは殆ど確定みたいなものだけど。

幸いにして門番らしき方が居た。

「すみません……」

無視された。

「あの、すみませんっ」

無視された……

「あの、聞いてますか？」

また無視だよ。うん、こうなることは知ってた。

仕方ない。ちょっと揺さぶってみよう。

「すみませんっ」

揺さぶりつつ聞いてみる。大きな胸がたゆんたゆんと揺れるのを至福の感情で見守る。

「……………はっ……………寝てませんよ、咲夜さん」

「咲夜さん？」

「え、あ……………お客様ですか？」

「あー……………いえ、ちょっと違うと思います」

「？」

首をかしげられても困る。

「気付いたらそこに倒れてたんですが、ここがどこか聞こうと思います」

そう告げると彼女は厄介事、と一瞬表情に載せて、すぐに笑みを浮かべて言い放った。

「それなら私からでは少し説明が難しいので……ちょっと待っていて下さい」

「はい」

少し待つとさっきのチャイナ服の門番さんがメイド服の人を連れて戻ってきた。

「んー。害意は感じないわね。いいでしょう、紅魔館は客としてあなたを歓迎します」

「え、あ、はい。よろしくおねがいします」

N e g r o n i I (後書き)

最後までお読みいただきありがとうございました。

N e g r o n i I I

I. N e g r o n i I I

応接間に通された僕は、少女と対面することになった。

少女は偉そうにふんぞり返り、こちらをその紅い瞳で射ぬくように見ている。

いや、別にソレはどうでもいい。いや、どうでもよくないんだけど、ソレ以上に重要なことからしたらどうでもいいと分類して良いだろう。

彼女には羽が生えていた。

嘘じゃないよ。本当に蝙蝠みたいな羽が生えてたんだ。胡散臭い？ 事実だ。どう否定したくても、僕の視覚は彼女から羽が生えているのを写すのをやめてはくれなかった。

「あなたが外で倒れていた外来人？」

「外で倒れていたのは僕ですが、外来人って？」

「咲夜、何も説明していないの？」

「はい、まだですわ」

「そう、なら一から言いましょう。あなたは今幻想郷に居るの」

幻想郷？　なんだ幻想郷って。桃源郷みたいなものか？　それとも月影の領域みたいなものだろうか。

「幻想郷って？」

「忘れ去られたもの、幻想と化したものの、妖、妖怪、そういったものの楽園よ。とはいえ、たまにあんたみたいな人間がふらっと紛れ込むことがあるのよ」

どっちかと言うとガクブル島の類だったらしい。大変なところに紛れ込んでしまったものだ。

「えっと、つまり、運命のいたずら、と？」

「そう、そんな感じ。帰りたい？」

「そりゃもちろん」

「なら、咲夜。明日にでも巫女のところに連れていきなさい」

「かしこまりました」

「……そうだ、名を聞いてなかったわね」

「あ、自己紹介を忘れてた。済まない。斯波、斯波範蔵だ」

「斯波範蔵、ね。歓迎するわ。一夜限りとは言え客人は客人ですもの」

「ああ、ありがとう」

て、君たちの名前は聞いてないんですけど……

翌日、僕はメイドさん——十六夜咲夜さんと言うらしい——に付き添われて、というよりも手を引いてもらって空を飛んで博麗神社という場所に向かった。

空を飛ぶことに驚くのはもうやめた。ソレ以上の神秘がこの世界には満ちていることを考えると、空を飛ぶなんてことは科学でも代用可能なものの筆頭になるだろうし、ソレ以上に帰還への期待が大きかった。

「無理ね」

だけど、その期待はたった一言で破られた。

「なんでですか？」

「あんた、魔術の影響を受けすぎているわ。だからそのままだと境界を通らないのよ」

「魔術？　僕が？」

魔術？　そんなものが存在するわけがない。あれは架空で、空想で、ファンタジーで、幻想で、誰もが心の底から存在を願っていて、だけど、物理学という永遠の宿敵に敗れ去った、文字通り夢想の産物でしかない。

と、思ったけど、ここは、この領域は、文字通りそういった幻想の産物が闊歩する領域だった。なら魔術が実在してもおかしくはないのか。

でも、僕が影響を受けた、つてのは承服しかねる。僕はそんな夢想の術に遭遇したことは無い……はずだ。

「ええ、そうよ。何か心当たりはないの？」

「いや、特には」

「斯波様は右胸を貫かれたはずなのにここに来た時には完治していた、とおっしゃっていましたが、それが原因じゃないかしら？」

「十中八九そうね。私の勘がそう告げてるわ」

いや、勘って……

でもあの青翠色の粒子がソレだとするのなら、結構お得なことになったんじゃないだろうか。切断されていた記録と記録がそれで繋がる。今ここに居るということが、かつて『外の世界』で生きていた僕の延長線上にあるとはつきりと言う事ができる。それは、悪いことではないと思う。

それに、幻想となった術の素養があるってことは、この世界で生きやすいってことなはずだから。

つまり、科学文明への憧憬と、その利便性を捨てることさえ出来れば、この幻想入りと言われる、僕の身に降り掛かってきた厄災は、それほどマイナス要素を持っていないとも言えるわけだ。いや、

現代文明の利便性を捨て去るなんて出来るわけ無いだろ。マイナス要素だらけだよ……

「なら間違いはなさそうね」

「えーと、じゃあ、どうします？」

とりあえず咲夜さんに訪ねてみる。どうやって生きるか、ソレを決めるには、僕はあまりにも無知で、無力で、彼女に頼るのが一番いいと思ったから。

「そうね……一旦戻りましょう」

「はい」

行きはそれほど意識しなかったのだけど、帰りは咲夜さんの手の柔らかさを意識しっぱなしだった。

あ、スカートの中身は見えなかった。アレだけミニなのに鉄壁とかすごい。

「それで、斯波、あなたには二つ選択肢が与えられるわ。一つは執事としてここで働くか、もうひとつは食料として私に貢献するか」

紅魔館に戻ってくると、昨日と同じ応接室に通され、再びあのやたらと偉そうな有翼の幼女と対面していた。咲夜さんは居ない。何でも仕事が忙しいらしく、本来は僕なんかにかまっている時間も惜しいらしい。

そして幼女は、僕に選択肢とは思えない選択肢を提示してきた。
二つ目の選択肢は無いだろう。死ぬぞ？　せっかく拾った生命をむ
ざむざ捨てる気には到底ならない。

「え、ソレ選択肢なんですか？　執事として働く以外の答が出てこ
ないんですけど」

「そうかしら？　勢い余って二つ目を選んでくれると有りがたかつ
ただけど」

「いえ、僕はそこまで狂っていません」

「そう、まあいいわ。あ……私の名を告げていなかったわね。私は
レミリア・スカーレット。この紅魔館の主で、デイルイトウォーカ
ーよ」

「デイルイトウォーカー？」

「陽の光を克服した吸血種のことよ」

吸血種。あるいは吸血鬼。ソレも弱点とされる陽の光を克服した
存在。どうやら、ただの幼女じゃなかったようだ。いや、翼がつい
てる時点ではなにかあるな、とは思っていたけど、まさかそんな大層
な存在であるとは思わなかった。

「へえ……あ、食料ってそういう意味だったんですか」

「そうよ……咲夜。彼に執事服を。あと、仕事も教えてやって」

そう言うと、再びどこからとも無く咲夜さんが現れた。

「かしこまりました。付いて来なさい」

「はい」

こうして僕はここ、紅魔館で働くことになったわけだ。

待遇は住み込みで、三食付き。給金は……ここの貨幣価値が判らないけど、多分そこそこ。

仕事はちょっとハード。だけど充実しているし、悪くはない職場だと思う。

N e g r o n i I I (後書き)

最後までお読みいただきありがとうございました。
感想指摘等あれば大歓迎です。

この話までがプロローグ扱いです。次話からは本編に移行します。

Trojan Horse I

I I. Trojan Horse I

昨日、僕はこの紅魔館の主であるレミア・スカーレットと取引をした。生き長らえさせてもらう代償として執事として紅魔館で働くこと。それが、取引の内容だ。

で、これからお仕事、昨日頼まれた、図書館の掃除の手伝いをするために地下に来ただけ……

開かない……

月の紋章が浮かんだドアを辿っていけば図書館に辿りつけると聞いていたんだけど、その月の紋章が浮かんだドアが開いてくれない。おいこれどうなってるんだよ欠陥商品じゃないのか。

「うーん。これは困った……」

とりあえず、最後の手段としてノックしてみる。もちろんだが反応はない。

「本当に困った……初日からこれだと追い出されたりしないか……」

うーん。強盗が出るというし、これはもしかしたらダミーなのだろうか。そう思いつく。

「他にも月の紋章のドアがあるかもしれないな」

そう言ってあたりを見渡してみる。玄関ホールのすぐ下にあるここには全部で1，2……6個のドアがあった。他に地下に行く階段なんて知らないし、というか教えてもらってないし、つまりここにあるドアのどれかが図書館に行けるはず。

2つ目のドアは……特に紋章みたいなものは無かった。代わりになんか凹んでいたけど。あと当然のように開かなかった。うーむ。

3つ目のドアは普通に開いた。でも倉庫みたいな感じでパツと見た感じガラクタばかり置かれていたので戻る。

4つ目は水と……木……かな？　あと火の紋章が刻まれていて、こっちも開かない。

と、そこまで調べた所でさっきの月の紋章のドアが開いた音がしたので戻ってみると小悪魔さんが居た。

「あ、やっぱり困ってましたか？　ごめんなさい、パチュリー様はあなたに紋章ドアのアンロック方法を教えていないのをすっかり忘れていて……」

「あ、いえ、大丈夫ですよ、全然大丈夫です」

「今日の分が終わったらアンロック魔法を教えますね」

「お願いします」

明日もこんなことになるのは嫌だからね。

小悪魔さんに先導されて紅魔館地下図書館に入ったのだけど、そこはもう庄巻と言うにふさわしい光景が広がっていた。

眼前に広がる本棚の列。いや、もはや群れと言ってもいいだろう。果ては見えず、奥のほうには既に靄がかかっており、水平線のその先まで続いているそうだった。

「すごい」

「そうですか？」

「そうですよ。外の世界にはこんな広い図書館なんて無いですよ」

「この図書館は自動で本を蒐集しますからねー」

「ソレはすごいですね。僕にも読めるかな」

「殆どが魔術書の類ですからやめたほうがいいですよー」

「それは残念です」

小悪魔さんに先導されて僕はその本棚の群れの奥へと足を踏み入れる。まるでジャングルみたいだ。木を抜いたら遭難すらしてしまうそうである。

たどり着いたのは、図書館の……どこら辺にあるのかはいまいち判然としないのだけど、入り口からは少し離れた位置にある読書スペースだった。長いテーブルと、見るからに座りやすく、疲れにくそうな、しかしアンティークな椅子が片側に10人分置かれている。

テーブルの中央には良く判らない、多分魔術的なものだろう光源が列を作っていて、本が読みやすい適度な明かりを放っていた。

そして、そこでただ一人、本を読んでいる紫の少女が、おそらくはパチュリー様だった。

「ドアの件は申し訳なかったわね」

「僕の力不足です」

「なに言ってるの。この幻想郷に踏み入れてまだ数日の人間があのロックを解くなんて、誰も期待していないわ」

「それはそうだとは思いますが……」

「後のことは小悪魔の指示に従って。あなたに掃除してもらうのはそれ程危険じゃないエリアだから多分大丈夫だとは思うけど、死にそうになったら助けを呼びなさい」

「は、はい」

流石に二日ぶり二度目の死亡体験なんてしたくないのでそのような自体に陥ることを内容に願いつつ、僕は入り口付近に戻っていく。小悪魔さんについていく。

「えっと、斯波さんにはここから……ここまでの本棚の埃を払っていただくのと、あと……ここの読書スペースの机の雑巾がけと……後は終わったら呼んで下さい。掃除用の道具は入り口の近くにある

用具室に入っています。それでは」

さて、仕事を託されたは良いんだけど、これ、一日で終わるのか？

妖精メイドに任せれば良いじゃん、というのとはとっくの昔に諦めている。彼女たちは絶賛雑談中だし、その無能っぷりから図書館には入れてもらえていないようだった。本汚したらパチュリー様相当怒りそうだしなあ……

とりあえず入り口まで戻ってから用具室を探すことにする。探すまでも無かったけど。

図書館には必須のカウンター。その中に2つある扉のうちの片方に用具室、と書かれており、そこを開けると清掃用の道具やら何やらがところ狭しと押し込められていた。

バケツとはたきそして雑巾を引っ張り出して気づく。水、どこだ……？　もしかして上から汲んで来ないといけないのか？　それは面倒だな。というかロックされてるから無理だろ。

仕方なしにもう片方のドアを開けてみる。こちらは給湯室とかそういうった類の部屋だったらしく、運良く水を手に入れた僕は任されたエリアへと戻っていった。

さて、本棚の埃を落とすか……

「あ、脚立が無いと上の方は届かないな」

用具室にあると良いんだが。

入り口まで戻り、用具室で脚立を発見し、また清掃担当エリアに戻るか、と思った所で入り口の重そうな木星のドアがピンク色の光の奔流へと飲み込まれ、吹き飛ばされる。それに続いて白と黒のエプロンドレスに見を包み、いかにも魔女と言った黒の三角帽を被った金髪の少女が箒にまたがって入ってくる。いや、入ってくるって言うよりは強硬突入か？ 敵？ それとも噂の強盗？

「お邪魔するぜー」

え？ なに？ 客？ 紅魔館の客ってこんな入り方するの？ それともこれがここでの礼儀作法なの？ そうだとしたらもうやってらんないよ……

T r o j a n H o r s e I (後書き)

最後までお読みいただきありがとうございます。
感想指摘等あれば大歓迎です。

T r o j a n H o r s e I I (前書き)

申し訳ありません、間が開いてしまいましたO r Z

Trojan Horse II

II. Trojan Horse II

「ん？ 誰だぜ、お前」

紅魔館地下図書館の正面ドアを爆破し、突破するという大胆不敵な方法で侵入してきた少女は、僕を視界に捉えると箒からさっそうと飛び降りてくる。

「斯波範蔵です。昨日から執事として働いています」

「へえ……ふうん……」

彼女の舐め回すような視線が僕の全身を這いずりまわる。

「レミリアも珍しいことをするんだな」

「まあ、たしかに気まぐれっぽかったですけど」

そう言うてはなかったが、顔にそう書いてあった。

「きっとそうだぜ」

でも断言しないで欲しかった。まあ、あの幼女は暇つぶしに餓えていたようだから仕方ないといえば仕方ないのだろう。

長く生きると退屈が最大の敵とも言うから娯楽とか変化の類は貴

重なんだろう。

「それで、あなたは？」

「ああ、自己紹介を忘れてたぜ。私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ」

普通？　そう言われると否定したくなる。

彼女の三角帽を取ってみる。違和感を感じる。感じるが、ヘッドドレスを付け足したらメイドさんとしてやっていけそうな気がする。気がするだけかもしれないけど。

「ヘッドドレス付け足したらメイドさんで通用しそうなのが普通の魔法使いなのか」

「なっ。おい、私はメイドなんかじゃないぜ。いいか、メイドっていうのは恐ろしい生物なんだ。時を止めて、気付いたら無数の銀のナイフで人を串刺しにし、流れ出る生き血をすすって悦楽と快楽に浸る。それがメイドって奴なんだぜ」

「いや、そんなメイド聞いたこと無いんだが……」

だいたいそれメイドじゃないだろ。サイコキラーか殺人ドールか、とりあえず精神的にヤバイ類の殺人犯じゃないか。あるいはジャック・ザ・リッパーとかさ。それに加えて吸血種の気があるとか、流石にそんなのが居たら幻想郷といえども数日で崩壊してしまいそうなんだが。

それにそれがメイドの定義だとしたらメイド妖精とかどうするん

だよ。あんな脳天気に通んでる奴らにそんな芸当ができるとは到底じゃないが思えないぞ。

「それはかわいそうだな。今言ったのはこのぼつd「何か言ったかしら？」……」

いきなり咲夜さんが現れた。さっきまで何もなかった空間から、気付いたら、と言うよりも、本当に、何の前触れもなく、いきなり咲夜さんが現れた。

魔理沙さんとは背中合わせに、後ろ手にナイフを持ち、魔理沙さんの首筋に押し当てている。パツと見かつこいいし、絵になるが、目の前で生でリアルタイムで見ると怖いな。

「な、なんでもないんだぜ」

「そう。今度その呼び方で言ったら……判るわよね？」

冷酷、冷酷、絶対零度。そう表現したとしてもまだ生ぬるいと思える感情を視線と声の双方に乗せて、咲夜さんは魔理沙さんを圧倒する。かわいそうに、彼女は今懸命に首を上下させる以外の動作がとれなくなっているじゃないか。まあ、自業自得だからそれ以上の同情はしないけど。

「なら良いわ……」

そういった後で彼女は再び消えた。

「えっと、もしかしてさっきのメイドの表現って」

嫌な予感がしつつもとおりあえず聞いてみる。どう聞いても今の状況を見ると咲夜さんのことを説明していたようにしか聞こえなくなってしまった。

「あ、ああ、咲夜のことだぜ」

「へ、へえ……」

や、やっぱりそうなのか。そして意外と怖い人なのか。怒らせない様にしよう。

「あ、そうそう」

また唐突に現れないでくださいよ、咲夜さん。心臓にものすごく悪いですから。

そして彼女は魔理沙さんと対峙し、親指で図書館正面ドアを指さしながら言った。

「黒白、付いて来なさい」

黒白か。なかなか適切な略称だな。モノクロって呼んであげても良いかもしれない。金髪が少しアレだけどまあ、どうにかなるだろう。

「嫌だぜ」

「付いて来なさい」

「嫌だぜ」

「ついて来い」

あ、ついに命令形に変わった。そして笑顔が凄い。能面みたいで凄い。そして眼が全然笑ってない怖い。ていうか超怖いぞ、これ。気温が数度下がったような気がするぐらいには怖い。そして青筋立ってるんですが。超怖いこの惨殺メイドさん。

「嫌だぜ。そして、なんでだぜ」

でも彼女も負けていないらしい。充分怖いとはいえ、さっきよりは怖くないため、魔理沙さんも一応、ある程度は、抵抗する気力があるようだった。

「自分で壊したもののぐらいいは直しなさい。あと、今日も本を強奪しに来たようだけど、それを許すわけには行かないわ」

「え!?! 魔理沙さんが件の強盗だったんですか？」

少しだけ、本当に少しだけびっくりする。こんな………うん、普通に胡散臭かったわ。全然普通に見えないのに普通の魔法使いとか名乗ってるし。なら仕方ないか。何が仕方ないのかは全然判らないけどね。

「違うぜ。あとなんか理不尽な納得のされ方をされたような気がするんだぜ」

「そうよ」

魔理沙さんと咲夜さんが間髪入れずに全く正反対の答えを言う。

まあ、流石にここは咲夜さんの言ってるほうが正しいだろう。そして微妙に鋭いな、魔理沙さん。

「すぐバレるような嘘はつかないでおきましょうよ」

「ああ、全くだぜ咲夜」

「いや、あんただからな」

「なんだとおっ」

そこ驚くところじゃないだろ。どう考えたら嘘を付いてるのが咲夜さんになるんだよ。

彼女の脳内は結構なお花畑で構成されているらしい、とだけ脳内副記憶にメモしておく。

「と言う訳だから邪魔したわね、清掃に戻っていいわ」

気付いたら魔理沙さんはロープで縛られており——残念なことに亀甲縛りではない——、咲夜さんは猛獣か何かを連行していくかのように彼女を引っ張って行った。

あれ大丈夫かな。首締まるんじゃないか？

……気にしないでおくか、うん。

咲夜さんに監視されながら必死で扉を直す魔理沙さんに背を向けて僕は本棚の森の中に再び足を踏み入れていった。

T r o j a n H o r s e I I (後書き)

とりあえず最低でも一週間に一話、出来れば二日に一話ぐらいのペースで投稿できるように頑張っていきたい……いきたい……です……
：o r z

結構書くのって難しい……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960ba/>

とある紅魔館執事の記録

2012年1月13日17時57分発行